

# 教科学習の理解を助けるためのJSLカリキュラム活用についての研究 ～ 外国人児童生徒の確かな学力定着のために ～

三重県教育委員会事務局 研修推進課 テーマ研修班 研修員 神川 怜子

## I 研究の目的

外国人児童生徒が教科学習を日本語で学び、在籍学級での学習活動に参加できる力を育成するため、JSLカリキュラム活用による教材開発と具体的な指導・支援方法について研究する。

## II 研究の内容

この研究は「JSLカリキュラム活用に向けての調査研究」「JSLカリキュラムを活用した教材開発と授業実践」を2つの柱として進めていくこととした。

### 1 調査研究から見えてきたこと

○JSLカリキュラムとは

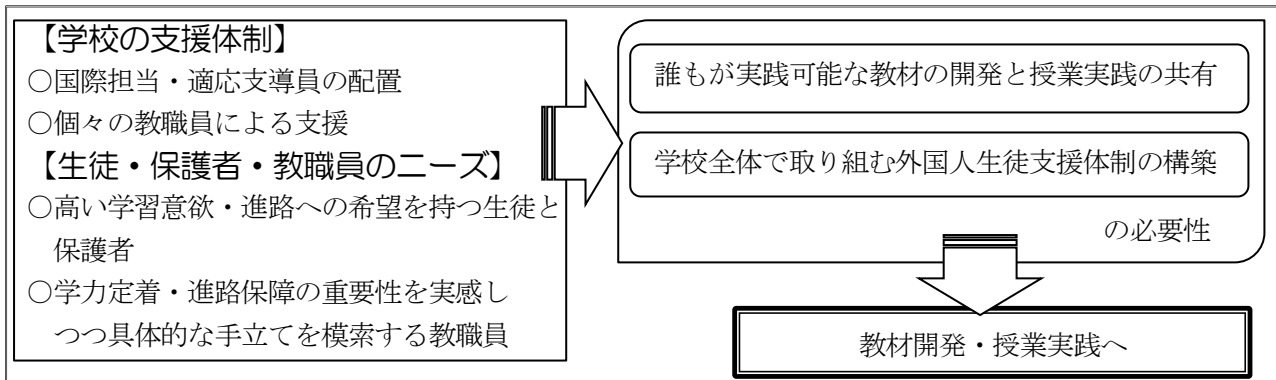
- ・日本語指導と教科指導を統合し、学習活動に参加するための力の育成をめざしたカリキュラム
- ・2つの目標（教科の目標と日本語の目標）をおいた学習活動

○JSLカリキュラム活用にあたっての留意事項

- ・外国人児童生徒の言語・学習状況および学校の指導状況の実態把握
- ・「5つの視点」（理解・表現・記憶・自律・情意支援）を踏まえた教材開発と授業実践

### 2 教材開発・授業実践（協力校にて）

(1) 外国人生徒の言語・学習状況および学校の指導状況についての実態調査より



(2) 教材開発と授業実践

「5つの視点」に基づき作成した教材と授業実践による具体的な指導・支援方法の一例を示した。

ア ワークシートの構成とフラッシュカードの例

内 容	ねらい (○英語 ●日本語)	
文法理解	○ 教科書基本本文による正確な文法理解 ● 理解に必要な教科専門用語（日本語）の理解	
新出単語練習	○●単語の発音確認 ○●単語の意味確認や書き取り練習等の自主学習	
文法用語確認	● 日本語での読み・内容理解の確認	
例文練習	○ 反復練習による文型定着 ● 英文に対応する日本語表現の習得	
練習問題	○●学習した文法（用語）定着の確認	
本文対訳	○ 学習内容を活用した長文の大意読み取り	

(様式4)

イ 授業実践と生徒の様子

	学習活動	生徒（対象生徒：1年生3名）の様子
第1時	・「can」の働きの理解 ・「can」を含む例文（肯定文）の構造理解 ・新出単語の発音練習 ・「can」を含む例文の読み書き	(A)英単語の発音に不安感。指導者と共に取り組んだ。 (B)日本語がほぼ理解できない状態。「日本語を読む」活動に多くの時間を費やしてしまった。 (C)学習理解・意欲ともに高い。自分の気づきを積極的に指導者に確認し学習を進めた。
第2時	・「can」を含む例文（疑問文・否定文）の構造理解 ・新出単語の発音練習 ・「can」を含む例文の読み書き	(A)少しずつ自力で取り組めた。疑問文・否定文のルールに自ら気づくこともできた。 (B)事前のルビ振りにより学習活動に注力できた。 (C)日本語の学習言語を積極的に使おうとする姿が見られた。
第3時	・本単元で習った文法や用語の復習 ・新出単語の発音練習 ・「can」を含む例文の問題演習	(A)意欲・理解ともに高まり英語の表現活動にも取り組んだ。 (B)指導者に用語を確認しながら問題演習に取り組んだ。 (C)日本語の学習言語について理解から活用へと発展。

(3) 授業実践のまとめ

外国人生徒の言語状況や学習状況を把握した上で指導計画を立て、実践の中で一人ひとりの強みや弱みにあわせてさらに支援方法を工夫することで、より効果的な指導・支援を図ることができた。実践前後に行った小テストでも生徒全員に得点の向上が見られ、「5つの視点」に基づいた教材の効果を確認できた。教科の専門用語は、言い換えや繰り返しを行うことで母語通訳に頼らず生徒に意味を伝えることができた。また、生徒に合った自主学習の方法を促す自律支援として、辞書活用の効果も確認できた。

しかし、授業では学習内容を理解できても時間の経過とともに忘れてしまうところが見受けられた。生徒の理解を定着させるために継続的な支援の方法を工夫する必要がある。重要な専門用語は授業中掲示できるようカード等で視覚化したり、生徒がいつでも自分で調べられるよう言い換えやルビ等を使った用語集を作ったりすることで接触機会を増やすことも、教科を問わず汎用的に活用できる支援方法になる。

### III 成果と課題

#### 1 成果

文献研究・資料収集・授業参観・研修会への参加を通して、JSLカリキュラムの活用とは背景や言語状況等がそれぞれ違う多様な外国人児童生徒一人ひとりにあわせて柔軟に支援方法を考え実践すべきものであることが理解できた。

今回の授業実践で教科の目標と日本語の目標を立て、目標にせまるための支援として「5つの視点」を活用し、見通しを持って教材開発・授業実践を行ったことで一定の効果を得ることができた。この手法を応用することで、教科・授業形態を問わず効果を得ることが可能ではないかと考えた。

#### 2 課題

今回の調査研究では、JSLカリキュラムを活用した教材開発・授業実践をもとに個に応じた指導・支援方法を探ることができたが、学校全体で取り組む支援体制を構築するための研究については今後の研究課題としたい。

これまで外国人児童生徒に対する日本語指導等における取組の集積と共有が進まなかった要因の1つに、各学校で個別の生徒への対応を文字通り「個別」で行ってきたことがあるのではないかと考える。JSLカリキュラムは個に応じた支援を行うカリキュラムであるが、そこで示されている「5つの視点」は教科・授業形態を問わず汎用的な活用が可能である。これを活用することは教職員一人ひとりの授業改善にもつながる。外国人児童生徒を含む全ての児童生徒の学力定着を図るため、JSLカリキュラム活用方法や学校全体での共有をめざした取組について今後の実践を通して研究していきたい。